

IV-59

米代川流域における舟運によるまちの変遷について ―能代・二ツ井を例に―

秋田大学 学生会員 ○菅原 恵介
 国土交通省 正会員 川村 公一
 秋田大学 フェロー 清水浩志郎
 秋田大学 正会員 木村 一裕

1. はじめに

江戸期から明治にかけて、米代川流域のまちは舟運を軸に、多くの物資と人で賑わった。しかし、まちの発達に大きな恩恵をもたらした舟運も、明治38年の奥羽本線全線開通を期に、物流の転換を余儀なくされ、衰退の一途を辿っていくこととなる。

そこで本研究では、依然空白の部分が多い歴史的事象の穴埋めをすることを前提とし、舟運がまちの形成に与えた影響を、物資の集散地で賑わった能代と、主要舟着場として発達した二ツ井を取り上げ考察するとともに、藩境を越えた交流にも着目し、時代背景を捉えつつ、米代川を媒体とした流域のまちの変遷について考察するものとする。

2. 米代川舟運の特徴

米代川は、その源を秋田・青森・岩手県境に位置する中岳（標高1,024メートル）に発する¹⁾。途中二ツ井町付近で支流最大の流域面積を持つ阿仁川や藤琴川と合流し、能代平野を流下し日本海に注ぐ¹⁾。南の雄物川の舟運は米が主体であった¹⁾が、米代川は流域の豊富な天然秋田杉と鉱物を主な物資としていた。支流の藤琴川と阿仁川が本流と合流する地点には、安永3年（1774）加護山精錬所が立地され（図-1参照）、当時の最新技術を用いて藩財政に莫大な利益をもたらした。そこでは鉱夫やその家族がまちを形成し、賑わいを見せた。物資が川を下ること、流域には舟着場が発達し、人と物の流れの中でまちを形成し発展していった。また、上方や松前など他領との交易を行う役

目を担っていたのが港町能代である。能代には、他領から年間77,000石もの物資が入ってきた²⁾。物資の集散地だけに商人が多く存在し、まちには商店や娯楽施設が多く並び、活気を持っていた。

3. 能代・二ツ井にみる流域のまちの発展

(1) 商業のまち能代

まちの変遷を考察するために、舟運の栄えた江戸期の能代のまちの様子を年表として表-1に示した。

表-1 能代のまちの変遷

秋田氏時代	野代は、米代川と漆に関連して町建された在町で、秋田氏時代の野代は、清助町、後町、下川端町、大町、上町、万町、中町、の7町が町建てされている ³⁾ 。
1590年代	野代に代官を置いているが、このころの野代はかなりまちづくりも整い、また漆の交易も盛んとなってきた ³⁾ 。
元和5年 (1619)頃	材木量の増加で能代は賑わう ⁴⁾ 。
承応期 (1652～ 1654)～ 寛文期 (1661～ 1672)	野代漆が盛んになった。(この頃、町の建直しが始まった) ⁵⁾
天和・貞享 (1681～ 1687)	秋田杉の輸送が多かった頃が絶頂期で、船の出入りも多く、従って問屋も増え、町の創設も盛んに行われた ³⁾ 。
享保期 (1716～ 1736)	能代は米代川の河口の港町として、木材の一大集散地であったばかりでなく、諸物資の流通機能を集約しており、家数1249軒を数えた ⁶⁾ 。
文化期 (1804～ 1818)	家数3000軒を数えて、20あまりの町を形成し、定期市の開設より常設店舗や常市並びに特定市として、いち早く発展していた ⁶⁾ 。
文化7 (1810)	加藤清右衛門景林が能代川上木山を能代奉行所から能代木山方担当とし、九代藩主佐竹義和(よしまさ)の命を受け、第三次休政改革を実施している ⁷⁾ 。
文化8 (1811)	加藤清右衛門景林が藩主の三公七民制の実施によって、藩内で約250万本の植林に成功している ⁷⁾ 。
文政3年 (1820)～ 天保3年 (1833)に 至る11年間	平均9000俵の秋田米が天津に廻米されている事から、秋田藩と上方市場との関連は、第一に西廻り海運によって直接に連繫し、第二には、越前敦賀・若狭小浜を媒介として結ばれていた ⁸⁾ 。
文政5年 (1822)	加藤清右衛門景林が能代木山方吟味役を兼務している。文政5年から天保4年にかけて、12年間、荒廢していた能代漆町の盤若野、後谷地、男鹿街道わき、キリガ原の地域に松苗76万8千本の植栽に成功 ⁷⁾ 。

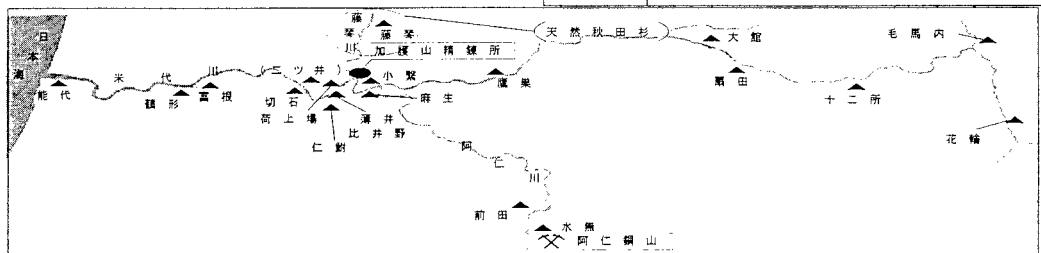


図-1 米代川流域図（作成：菅原）

表－１（続き）

天保年間 (1830～ 1844)	米代川を利用した運搬物資をみると、米・大豆・銅・硫黄などを能代に出し、塩・松前物(水産物・水産加工物)・砂糖・日用品を上流各港に荷上げしていたことが記載されている。従って、各河港には舟場集落が発達し、この地を拠点に、その後背地への物資供給地として、また、地場産物との交換地としても、市場開設の立地条件が整い、藩政期に既に定期市の開設が確認されているところである ⁹⁾ 。
嘉永元年 (1848)頃	60～50石積の川船23艘、廻船450石積・350石積・300石積各1艘、100石積8艘 ⁹⁾ を所有。
嘉永3年 (1850)	加藤景林の嫡子、景琴(かぎきよ)は、この年から松苗14万3688本を植栽している ⁷⁾ 。

能代のまちの形成・発展模様を考えたとき、当然港町としての要因が大きい。木材の流通が盛んになれば、町建てが頻繁に行われ交易も盛んになり、人の往来も激しくなる。賑わいの要素がそこには数多く存在している。また、金比羅神社は昔から、船乗りの守護神として、日本海岸の船乗漁民達の信仰を集めていた。特に祭典日には数千人の人が参詣に集まった¹⁵⁾、という記録もある。

（２）林業のまち二ツ井

同じく二ツ井地区のまちの様子を年表として表－２に示した。二ツ井地区は、元来支流藤琴川の木材と阿仁川の銅という、まさに舟運に依存した地域である。舟運が盛んだっただけに、阿仁銅山は山間僻地にあつ

表－２ 二ツ井地区のまちの変遷

佐竹藩時代	羽州街道の駅馬御用を勤めるために、荷上場村という宿聚をたてた。ここでも定期市が開かれ活気づいていた ¹⁰⁾ 。
17世紀中盤すぎ	乱伐によって林産資源の枯渇が目立つ→取引量減少没落する木材問屋も出始める。このころ金銀山の資源も目立つようになり、藩財政に深刻な影響をもたらした ⁴⁾ 。
寛文6年 (1666)	第一期林政改革 ¹¹⁾ 。
寛文10年 (1670)	阿仁銅山の開発 ⁴⁾ 。
寛文15年 (1702)	藩直営となる ⁴⁾ 。
享保年中 (1716～ 1735)	水無は阿仁町の鉱山町に連続する鉱山町であり、この時期にはすでに130軒の市が開設されていた ⁹⁾ 。
享保19年 (1734)	月の5、15、25日は市日になった。今から260年以上前に二ツ井市場が開かれていた ¹²⁾ 。
宝暦年間 (1751～1763)	秋田杉が3分の1に減って藩の財政に大きな影響を及ぼした ⁴⁾ 。
宝暦12年 (1762)	第二期林政改革 ¹¹⁾ 。
宝暦13年 (1763)	舟の積み荷、夜の通行を監視し、「御証憑」なし一般貨物から荷切銭を徴収するために、荷上場番所が設置された ¹⁰⁾ 。
安永3年 (1774)	加護山精錬所ができる ¹¹⁾ 。
安永8年 (1779)	比井野：家数112軒、人口419人、馬84疋 薄井：46軒、233人、70疋 ¹³⁾
天明7年 (1787)	荷上場：家数81軒、人数347人、馬105疋 比井野：43軒、212人、47疋 薄井：35軒、230人、83疋 ¹²⁾
寛政年中 (1789～ 1800)	水無の市はこの時期200軒に達し、鉱山労働者・銅山方を相手とする商人の出入りも旺盛であった。それに、阿仁川を利用した「阿仁船」と呼ばれた川舟の運航も注目される ⁹⁾ 。
明治9年 (1876)	比井野と薄井両村が合併して二ツ井村となる ⁹⁾ 。
明治30年 (1897)	阿仁銅山の文明の発達は著しく、この年には鉱山事務所に最初の電話が開通 ⁴⁾ 。
明治31年 (1898)頃	二ツ井舟場は水路と陸路の結節点として重要な役目を担っていた。特に能代＝大館間を往復する「郵便船」の定日停泊地として知られていた。定期市が開かれ、まちは活気づいていた ⁹⁾ 。
明治35年 (1902)	町制を施行して二ツ井町となった ⁹⁾ 。

ても中央からの文化の浸透が早く、東北地方でもその先駆であった⁴⁾。この地域に住んでいた人の多くは、林業・鉱業に携わっていた者やその家族がほとんどで、彼等を中心に定期市が開かれ、まちが形成されていった。二ツ井地区の発展はこういった産業、特に地場産業である営林関係に因るところが大きい。

4. 藩境を越えた物流

延宝5年(1677)に領境論争が決着する¹⁶⁾まで、秋田藩と南部藩との間には争いが耐えなかった。しかし、この年以降は物流がしやすくなっている。両藩間における物流ルートには街道・馬を使った陸路コースと、舟運による水路コースの2つが存在する。下り荷には南部銅があり、冬期は北上川を、他の期間は米代川を下して大阪へ廻送していた。このルート選択においては、季節要因以外に、通行税、過去の論争といった要因が考えられる。また、能代港からは特に塩が上った¹⁴⁾。舟場として発展を見せたのが扇田で、陸路をとった物資も一度ここで貫目を改めて舟に積み換えられ米代川を下った¹⁴⁾。このように、藩境を越える流通ルートは街道と舟運をうまく使い分けたものであった。

5. まとめ

本研究では、文献による基礎調査と、略年表から舟運によるまちの変遷の様子を考察した。これからの課題として、「古地図からみる能代のまちの変遷」、「能代にみる港町としての機能に関する考察」などが考えられる。

《参考文献》

- 1) 川村村『米代川 その治水・利水の歴史』無明舎出版
- 2) 秋田県『秋田縣統計書』秋田株式會社
- 3) 秋田県土木部『秋田県土木史 第二巻』(社) 秋田県建設技術センター
- 4) 阿仁町『阿仁町史』阿仁町史編纂委員会
- 5) 秋田県土木部『秋田県土木史 第三巻』(社) 秋田県建設技術センター
- 6) 仙道良次『秋田県の定期市』川井書店
- 7) 長岡幸作『郷土史の窓 能代湊・松山周辺史話』北羽新報社
- 8) 秋田県『秋田県史 第三巻 近世編 下』(株) 加賀谷書店
- 9) 半田市太郎『秋田の歴史』秋田県地域社会研究会
- 10) 秋田県二ツ井『GURURI ふたついきみまち百科』
- 11) 二ツ井町町史編纂委員会『二ツ井町史』秋田県山本郡二ツ井町
- 12) 二ツ井町史編纂委員会『菊池文書』秋田県二ツ井町
- 13) 二ツ井町史編纂委員会『秋林・田口文書』秋田県二ツ井町
- 14) 松橋栄信『米代川の舟運』よねしろ書房
- 15) 野添憲治『図説 能代の歴史 上巻』無明舎出版
- 16) 大館市史編纂委員会『大館市史 第二巻』大館市